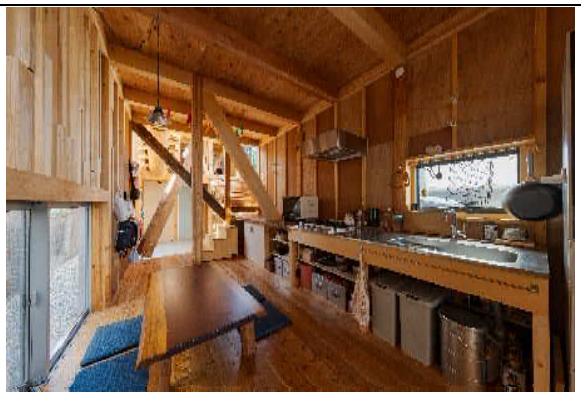
別紙(写真)

すまいる愛知住宅賞／愛知県知事賞　　受賞作品「十塚の家」

すまいる愛知住宅賞／名古屋市長賞　　受賞作品「House & Office SH 在と材と財と庫」



すまいる愛知住宅賞／住宅金融支援機構東海支店長賞　愛知県森林協会長賞
受賞作品「南松山の住居」

すまいる愛知住宅賞／ＵＲ都市機構中部支社長賞　　受賞作品「多角形の中庭のある家」

すまいる愛知住宅賞／愛知県住宅供給公社理事長賞　受賞作品「柔らかな間合い」

すまいる愛知住宅賞／名古屋市住宅供給公社理事長賞
受賞作品「土間縁側のいえ」

佳作　　受賞作品「梅ノ木の家」

佳作　　受賞作品「Dwelling in the Rhythm of the Terrain－地形のリズムに住まう－」

別紙(総評)

第 36 回すまいる愛知住宅賞　総評

審査委員長　塚本由晴（つかもとよしはる）

現地審査はいつも勉強になりますが、審査はしなければなりません。私は設計が事物との出会いに開かれているかに注目して審査にあたりました。

「十塚の家」は、トンネル状の半外部を経由した光の反射が壁の上半分に設けられた大ガラスから滲み入り、室内を静穏な雰囲気で満たし、そこに高／低、開／閉、明／暗を組み合わせた色々な場所が用意されています。元ガラス工場の大きな気積と住むことの間に生まれたこの光のふるまいが、強く印象に残りました。

「南松山の住居」は、強い日射、車の騒音、川の増水などの問題を克服するワンルーム住宅の原型とも言える仕上がりです。その一方で、シェルターとしての住まいの構築があまりにも精緻に行われると、その場所の特徴が、暮らしを脅かす要素に代表されてしまう難しさにも気づかされました。

「柔らかな間合い」は、分離発注とセルフビルドのあいだで実現された小屋のような住まいです。傷んだ部分だけ交換できるよう、柱、梁は外側から外せること、波板の定尺を加工せずに屋根に使うこと、部材切り出しをホームセンターや材料メーカーに外注し、宅急便で受け取ることなど、小規模だからできる実験を通して作る喜びを住まいに取り戻すマニフェストたり得ています。

「在と材と財と庫」は、元駐車場に建つ立体的ケーススタディーハウスに、工務店に死蔵されていた材木が、予想を裏切る大きさと角度で耐震ブレースとして挿入されており、度肝を抜かれました。ただそれが記号的に感じられたのも確かで、長手壁面も在庫材木によるブレース構造に徹していたら違う印象になったかも知れません。

「多角形の中庭のある家」は、窓に家具的しつらえが寄り添った幾つもの居場所が数珠繋ぎに中庭を囲む回遊性と、内部、中庭、外部を跨いだ視線の抜けにより、家の中から町までを柔らかく、優しく結ぶ住まいになっています。

「土間縁側のいえ」は、仏壇が起点になって、畳間、縁側、土間が順に取り巻く配置に、近所の人や親戚が集まる母屋の事情がよく現れています。中心にあるシースルー階段が、あらゆる場所を繋ぐ結節点となり、動線を省いて余白としての土間を生み出しています。

これら 6 点が審査員の支持を集め、すまいる愛知住宅賞の各賞に選ばれました。

「梅ノ木の家」「Dwelling in the Rhythm of the Terrain」は、個室を敷地の縁に寄せてできた中央の領域を、半分外に開いた外部として位置付ける意図はどちらもうまくいっているのですが、図式勝ちの印象が拭えなかったからか、審査員の評価は佳作に留まりました。

建築家の皆様、建主の皆様、現地審査にご協力いただきありがとうございました。